おおさか KEY わーど 第75回

数学ならば大阪市は「素数」である。

ほかにない都市をめざして

『二都物語』(A Tale of Two Cities、1859年刊)は、フランス革命期のパリとロンドンを舞台としたディケンズの長編小説だが、日本にも“三都”という言葉がある。幕府直轄の大都市〈江戸〉〈京都〉〈大坂〉を総称した呼び方である。これら三都市は、歴史的にも文化的にも強い個性をもって繁栄し、「天下の貨七分は浪華にあり、浪華の貨七分は舟中にあり」の名言を残した広瀬旭荘(きょくそう)も、『九桂草堂随筆』で各都市の違いを語っている。

明治から昭和には“三府”という言い方もあった。東京が都になるのは、戦時体制強化の非常措置によるもので、東京府、京都府、大阪府を“三府”と呼んだのである。徳富蘆花原作の「不如帰」の、覗(のぞ)きからくりも「三府の一(いち)の東京で、波に漂うますらおが、はかなき恋にさまよいし…」と歌いはじめる。

“三都”に私は数学的な説明を考えている。素数(prime number)のような都市と見なせはしないか。素数は自然数のうち、1かそれ自身でしか割れない数字だ。2，3，5，7，11、13…と続く。4は2で割れ(2×2)、6も2と3で割れるので(2×3)素数ではないが、3は素数だ。“三都”も、その都市固有の要素以外で分割できない性質の都市と解釈してみるのである。

逆の事例をあげれば、京都市観光協会の呼びかけで1985年、「小京都」を称する都市が集まり「全国京都会議」が発足した。「小京都」とは、千年の王城の地・京都になれないが、環境や歴史が京都に似た街という意味、つまり素数の都市・京都に2や3を掛けた都市と言うこともできる。1996年からは、関東の川越市、栃木市、佐原市(現香取市)が「小江戸サミット」を開催する。これも江戸に2や3を掛けた街だろう。

「小京都」「小江戸」は、それ以上分割できない素数都市“三都”を模倣した都市である。「西遊記」で孫悟空が釈迦の掌から逃げ出せなかったように、江戸や京都の枠組みからは抜けだせない。そこに問題意識を感じ、金沢、高山、盛岡などは「全国京都会議」を退会している。

では大阪はどうだろう。明治末ぐらいから大阪は、工業力において「東洋のマンチェスター」と呼ばれた。イギリスの工業都市マンチェスターに幾らかの数字を掛けた「小マンチェスター」であることを自慢した訳だが、一方国内的には「小大阪」を自称した街が存在した。

大阪歴史博物館の船越幹央さんによると、かつては東北の大阪(郡山)、関東の大阪(下館)、四国の大阪(今治)、山陰の大阪(米子)、北陸の大阪(高岡)など、全国に大阪を冠した都市のイメージが展開していたらしい(同氏「「大阪」と呼ばれた街―模倣する都市と模倣される都市」『大大阪イメージ』所収)。

また、全国に「○○銀座」があるように、「○○心斎橋」「○○の千日前」もあったという。1970年代中期の話だが、高校のクラス合宿で岐阜県の山間の地方都市に行ったところ、「○○の心斎橋」という看板を見た記憶がある。イメージを誘発する言葉で都市を見直すことは新鮮だし、街をよくする上で参考になるだろう。

そんなことを考えていたら、少し驚いたことがある。「幸福度」をテーマとした2016年版の『全47都道府県幸福度ランキング』(日本総合研究所編)で、大阪府は全国44位、市は政令指定都市で最下位の20位だというのだ。たしか、2011年の英国経済誌の調査による世界140都市の住みやすさランキングでは、大阪市はアジア最高の12位だったはずである(そのとき東京は18位)。調査の指標にもよるだろうが、ここ数年のポジションの後退はどうしたことだろう。

“三都”と呼ばれた大阪の栄光の歴史を紹介しようと書きはじめたが、現在の都市番付でのポジションを知ると、何を語るべきか考えあぐねてしまう。しかし“三都”であったことは事実である。他都市に2や3を掛けた街ではなく、歴史や文化を基軸に大阪以外の何ものでもない街を市民自らつくっていくしかないのだろう。

福島県にある郡山市郡山公会堂。大正13(1924)年の市制施行を記念に建設され、オランダの平和宮や大阪市中央公会堂がモデルとされる。
優美な姿は、どことなく中之島の公会堂に似ている。国登録有形文化財。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』(創元社)など。